

雲貴高原におけるオグロツルの個体群と分布

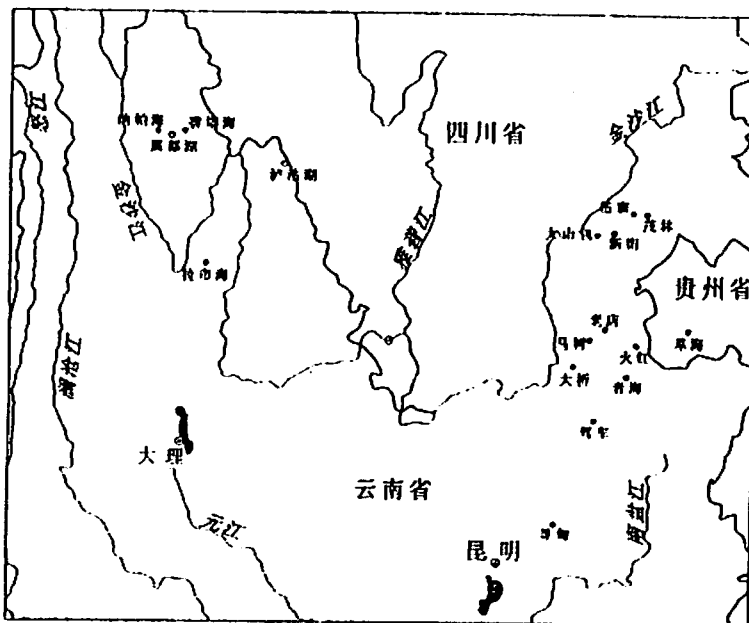
李鳳山¹・楊芳²

¹I.C.F.・²雲南省林業庁

摘要；雲貴高原には(1) 雲南省西部、(2) 雲南省東北部と貴州省西北部に二つのオグロツルの越冬地がある。この二つのオグロツルの越冬地の個体数は世界全体の1/4ないし1/3にもなる。I.C.Fと雲南省林業庁の共同により2001-2002年の冬季に雲貴高原におけるオグロツルの個体数を同時一斉調査をおこなった。今回の調査はすでに知られている場所のほか、未調査の地域を含め17地域を調査し、そのうち15地域でオグロツルの生息を確認した。2002年1月18日と19日にそれぞれ3261羽と3182羽のオグロツルを記録し、このほか、本調査によりクロツル804羽と1158羽、インドガン1759羽と2978羽、アカツクシガモ2442羽と5444羽を記録した。1991-1992年の冬季に調査した結果と比較して90%以上の増加を示した。

オグロツル(*Grus nigricollis*)は世界のツル類15種のうち唯一高原に生息するツルであり、その分布域は東経78°～104°、北緯28°～38°の間にあり、西はアル金山と崑崙山脈、北は祁連山、東は烏蒙山脈、南はヒマラヤ山脈^[1]に囲まれている。現在までの調査結果によるとオグロツルは三つの個体群に別れていると推測され^[1]、西部の個体群は新疆省東南部、青海省西部、チベット中西部で繁殖し、チベット中南部の雅魯藏布江渓谷地帯で越冬し、少数はヒマラヤを越えブータンで越冬するものもある。中部の個体群は青海省南部で繁殖し、雲南省西北部の横断山脈地域で越冬する。東部の個体群は四川省北部で繁殖し、雲南省東北部と貴州省西北部で越冬する。1991-92年の越冬オグロツル一斉調査によれば世界的なオグロツルの個体数は5600か

図1 雲南省と貴州省におけるオグロツルの分布



ら6000羽の間とされ、そのうち、西部の個体群は4200~4300羽、中部の個体群は少なく100羽、東部の個体群は1300~1600羽^[2]とされている。

雲貴高原はオグロツルの中部と東部個体群の越冬地であるが、この地域は交通、通信の不便な僻地で、今までこの地域のオグロツルの個体数調査は理想的な成果を挙げることができなかった。2001-2003年冬季、国際ツル基金(International Crane Foundation: ICF)と雲南省林業庁との連合で雲貴高原におけるオグロツルの一斉調査を行ない、雲貴高原におけるオグロツルの個体数と分布をつぶさに調査することができた。

1. 個体数計測方法

今回の調査はねぐらにいる個体数を一斉に調査する方法を用いた。この調査を開始する前に雲南省の納帕海と大山包において調査員の、野外での水鳥の識別とカウント方法の訓練を行ない、あらかじめ17地点、45ヵ所の水鳥のねぐらを調査地と決定した。

調査時期は2002年1月18、19日とし、112名が調査に参加し、望遠鏡(40~60×)6個、双眼鏡(10×)45個を用いた。各ねぐらに2名を配置し、観察、カウントを行った。調査員は7:30時以前にねぐら観察場所に到着し、その後カウントを行った。場所により霧が濃く、カウントが遅れた所もあったが、10:30時までにはすべてのカウントは完了した。17地点でオグロツル以外にクロツル(*Grus grus*)、インドガン(*Anaser indicus*)、アカツクシガモ(*Tadorna ferruginea*)を観察した。

2. 結果と討論

2.1 分布地域 今回調査を行った雲貴高原の17地点中15地点でオグロツルを観察し、12地

表1 2002年1月18~19日雲貴高原のオグロツル、その他の水鳥個体数

越冬地点	オグロツル		クロツル		インドガン		アカツクシガモ	
	18日	19日	18日	19日	18日	19日	18日	19日
A. 云南西北部								
泸沽湖(宁蒗县)	0	0	3	0	26	32	38	55
碧塔海(中甸县)	17	32	0	0	0	0	6	4
纳帕海(中甸县)	281	292	2	2	303	333	602	634
属都湖(中甸县)	0	0	0	0	0	12	0	0
拉市海(丽江县)	6	4	15	39	410	788	882	989
小計	304	328	20	41	739	1165	1528	1682
B. 云南东北部								
大桥(会泽县)	450	353	162	551	375	937	249	1618
者海(会泽县)	79	190	29	9	146	180	486	648
大红(会泽县)	16	16	0	0	0	0	26	18
鸭车(会泽县)	48	48	0	0	0	0	231	231
大山包(昭阳区)	916	930	0	0	16	24	130	179
新街(鲁甸县)	43	23	7	7	0	0	4	0
马树(巧家县)	109	119	23	21	71	71	209	211
老店(巧家县)	40	32	10	11	0	0	0	0
寻甸(寻甸县)	84	68	0	0	0	0	150	214
茂林(水善县)	288	215	0	0	0	0	26	24
伍寨(水善县)	116	98	0	0	0	0	23	0
小計	2189	2092	231	599	608	1212	1534	3143
C. 贵州西北部								
草海(威宁县)	768	762	553	518	412	601	380	619
总计	3261	3182	804	1158	1759	2978	3442	5444

点が雲南省東北部と貴州省西北部の烏蒙山地に属している(図1)。しかし、⁴²⁷²瀘沽湖にはオグロツルは見られず、3羽のクロツルを観察した(表1)。

納帕海を除くほか雲南省西北部、その他の地域のオグロツルの生息は非常に不安定で毎年減少している。寧蒗の瀘沽湖、永寧の^{ニイラッ}泥鰱溝および鶴慶県の草海には、かつてオグロツルが分布していたが、この二三十年来見ることが珍しくなった^[3,4]。しかし、筆者は今回、麗江県の拉市海で何年も見ることがなかったオグロツルを観察した^[5,6,3]。

2.2 各群の個体数 2002年1月18日と19日の雲貴高原におけるオグロツルの観察記録は3261羽と3182羽であった(表1)。その他の鳥類はクロツル804羽と1158羽、インドガン1759羽と2978羽、アカツクシガモ3442羽と5444羽を観察した。1月18日のカウント結果を例にとると、この日3261羽のオグロツルをカウントし、そのうち東部の個体群が2957羽(雲南省東北部が2189羽、貴州省西北部が768羽)で、雲貴高原のオグロツルの90.7%を占め、雲南省西北部では304羽、9.3%を占めるのみであった。

18日と19日の個体数を比較してみるとオグロツルの個体数は両日の差が大きくないが、クロツル、インドガン、アカツクシガモの両日の差は大きい。インドガンを例に見ると18日の個体数は19日の70%でしかない。その原因はこれら3種の体型が比較的小さく、識別しにくいいため、不確実なものとなった。

雲貴両省には国家級とその他のオグロツル保護区が8カ所あり、これらは大山包、^{ツツバ}草海、大橋、納帕海、瀘沽湖、^{ヒイラ}碧塔海、^ラ拉市海、^{ツツバ}者海である。この8カ所の自然保護区のオグロツルの個体数は2517羽(2002年1月18日の数)で全体の77.2%を占める。そのうち、大山包と草海は雲貴両省のただオグロツルのための国家級自然保護区で、この両自然保護区で、916羽と768羽のオグロツルを観察され、それはこの地域全体のオグロツル総数の28.1%と23.6%に相当する。これらの自然保護区におけるオグロツルの保護が重要な位置を示していることを物語っている。

過去10年、この地域におけるオグロツルの個体数は非常に増えている。1991-1992年ICFにより調査された雲貴高原のオグロツルは1400~1700羽^[2]であったが、今回の調査で3182~3262羽と、10年前と比較して90%以上の増加となっている。個体数増加の原因は下の幾つかによると思われる。

- (1) 有効な保護管理措置をとった。これによりこの地域での狩猟がなくなった。
- (2) 当地を管理する行政が給餌を行ない、越冬時のオグロツルの欠食による死亡が減少した。
- (3) 今回の調査区域は10年前と比較して、^ラ老店、^{ツツバ}架車等の6地点が調査地として増えたこと。
- (4) 幾つかの場所で霧が深く、重複カウントをの可能性を排除することはできない。

今回の調査で、少数の地域内のクロツル、インドガン、アカツクシガモなどが記録された。この3種の水鳥は、オグロツルの分布域に比較して分布域が大きいことから、この3種の水鳥のカウント結果が雲貴両省の彼らの全体数を表わすものではない。

3. 建議

今回の調査で雲貴高原のオグロツルの個体数が大きく増加したにも関わらず、それがオグロツルの生息環境の改善を意味するものではない。オグロツルおよび生息地の科学的な研究、保護管理の作業は、依然として、さらに強加、継続することを建議する。

(1) オグロツルの越冬区域の生息環境の保護。雲南省東北部は長江源流域における水源保護林建設の重点地域で、この10年来、オグロツルの採食地である荒れた草原に植林作業が進んでいる。これら地域は当然、土壌を固めるための良好な草本植物を植林し、水や土の保持という目的

を果たすばかりでなく、オグロツルの食物資源と生息環境を保証することができる。

(2)オグロツルに対する給餌は慎重に行うべきである。オグロツルへの給餌によって、食物欠乏による死亡数が減少したことは事実であるが、同時に越冬個体数が増加し、1ヵ所に集中することとなり感染性疾患の発生、伝播を容易にし、感染症のキャリアを育てる恐れがある。したがって、まず給餌の必要性和その量、給餌場所、時間などをよく研究し、その上で、如何に作業を進めるかを決定すべきである。

(3)雲南省西北部におけるツル個体群の活力の維持。雲南省西北部に生息するツル類個体群が減少傾向にあるのは、この個体群の活力が低下していることを意味している。したがって、この地域のオグロツルの活力を維持し、さらに高める必要があり、現存のオグロツルの越冬地を保護するのは必須であるが、オグロツルが生息していた過去の環境を復活することで、中甸県の納海を中心として周囲に向かって放射状の一大越冬環境を造るべきである。

(4)ツル類の観察強化。今回の調査の多くの場所が自然保護区であるが、ツル類の生息環境を継続観察しているところは非常に少ない。これらの保護区のツル類に対する観察を強化促進し、観察と研究作業の経験を交流し、保護管理作業に供すべきである。